令和７（2025）年度
特定の分野に修学する学生への
海外研修事業
終了報告書

公益財団法人サン佐藤財団

１．はじめに

当財団は、特定の分野に修学する高等専門学校生、四年制大学生及び大学院生を対象に、経済的理由により海外研修への参加が困難な学生等へ研修の機会を提供する「特定の分野に修学する学生への海外研修事業」を実施している。

本事業は、海外の企業や大学等の訪問、現地で活動する研究者や実務家との交流、課題に取り組む実践的な活動を通じて、学生が専門分野の枠を越えて学び、将来の学修や社会での活動につながる視野を広げる機会を提供するものである。

令和７（2025）年度の募集に係る海外研修は、令和８（2026）年８月 23 日から８月 30 日まで、米国カリフォルニア州シリコンバレーを中心に実施した。研修には、自然科学、工学、社会科学など、多様な専門領域で学ぶ１２名の研修生が参加した。

本報告書は、研修生から提出された終了報告書の内容をもとに、海外研修を通じて得られた学びや気づき、今後の学業・進路への活用、研修への感想、研修生としての自覚や今後への抱負について取りまとめたものである。併せて、今後の事業に対する要望や提案についても整理した。

２．海外研修を通じて得られた学び

研修生からの報告によれば、企業や大学を実際に訪れ、現地で活動する人々と直接対話したことにより、書籍やインターネットだけでは得られない知見や視点を得ることができた。遠い存在と感じていた海外の研究環境や企業活動を、具体的な学修・進路の選択肢として捉える契機にもなっていた。

Apple、Google、Intel 等の拠点への訪問では、技術や企業の歴史に加え、働き方、組織文化、キャンパス空間などに関心が向けられた。研修生は、大学、企業、人材、資金が結びつき、人や情報が行き交う環境が、新しい発想や挑戦を支えていると感じていた。

スタンフォード大学での活動や研究者との面談では、研究の内容だけでなく、問いを持ち続ける姿勢、研究テーマの選び方、海外の研究環境やキャリアについて学んだとの報告があった。また、現地の実務家による講義では、技術の社会実装に必要な市場性や事業性、課題を抽象化して捉え直す考え方などへの理解が深められた。

Innovation Challenge やフィールドリサーチでは、初対面の人に英語で声をかけ、仮説を検証する活動を経験した。自分たちの考えに合う情報を集めるだけでなく、相手の話を受け止め、前提や問いそのものを修正することの重要性が報告された。最終発表では、異なる専門を持つメンバーの視点を整理し、一つの提案にまとめる難しさと意義も実感されていた。

Ridge Vineyards の訪問では、製造工程や歴史に触れ、品質を支える環境や技術の蓄積、既存の建物や営みを生かす考え方、文化的な教養について学ぶ機会となった。さらに、一部の研修生は、自ら研究者との面談や交流イベントへの参加、専門分野に関係する施設の視察等を行い、共通プログラムに加えて自身の関心を深めていた。

こうした経験を通じて、研修生は、自ら行動し、対話を重ねることで機会が広がることを実感した。また、失敗を恐れずに挑戦する姿勢についても、失敗そのものを目的と

するのではなく、目的を明確にし、経験を振り返って次の行動に生かすことが重要であるという理解が示された。

３．今後の学業や進路で積極的に取り組むこと

研修生からは、今回の学びを自身の専門分野へ持ち帰り、研究を深めることや、将来の進路に向けた具体的な行動へつなげたいという意欲が示された。現地で研究者や実務家の経験を聞いたことは、将来像を描き、自分に必要な力を考える機会となっていた。

学修・研究への活用については、日々の学びの中で「なぜ」を問い続けることや、現場で生まれた疑問を研究につなげ、その成果を社会へ還元することへの関心が示された。専門知識を深めるとともに、研究成果を発表にとどめず、実際の課題解決へ結びつけたいという目標も挙げられていた。

研究開発や事業の検討では、技術的な性能に加え、誰のどのような課題を解決するのかを重視し、利用者への聞き取りを生かす意向が示された。現地で経験した仮説の検証や対話の方法を、自身の研究や活動の改善に取り入れたいとする回答もあった。

異分野との連携については、他者との対話を通じて新しい技術や考え方への理解を深め、人々の暮らしや社会に役立つ提案へつなげたいという目標が示された。また、現場の状況や人間関係を丁寧に捉え、予想外の気づきに応じて研究の問いを更新する姿勢を、今後の調査や実践へ生かしたいとの報告もあった。

進路形成については、大学院進学、海外での学修・研究、国内外の企業への就職、起業など、幅広い選択肢を検討する姿勢が見られた。現地での経験を通じて将来の目標をより具体的に考え、必要な準備を進めるとともに、身につけた専門性を地域や社会の発展に役立てたいという抱負が示された。

共通する課題として、英語で研究や考えを簡潔に伝える力、質問や議論を行う力の必要性が挙げられていた。研修生は、自身の専門性を高めるとともに、語学力や発信力の向上、共同研究や交流の機会を自ら求める行動を、今後の学修と進路形成に生かそうとしていた。

４．海外研修に参加しての感想

研修生からは、海外研修の機会と、渡航前の準備から現地での活動、帰国後までの支援に対する感謝の声が寄せられた。個人では得難い訪問や交流の機会が設けられたことを、今後の成長につながる経験として受け止めていた。

企業や大学の見学に加え、自ら考え、質問し、行動する活動が多く設けられていたことを評価する回答が見られた。実際の対話や試行錯誤を通じて理解が深まったこと、未知の環境へ踏み出す心理的な壁を越えられたことなど、体験を伴う学びの価値が示されていた。

また、異なる専門分野で学ぶ研修生と時間を共にし、研究や将来の目標について意見を交わしたことも、大きな刺激となっていた。自分にない視点を知り、互いの専門性を補い合う可能性を感じたとの感想もあり、研修生同士のつながりそのものを大切な財産とする声もあった。

現地で出会った研究者や実務家との関係が、帰国後の進路相談へつながった事例も報告された。今回の研修は、海外の知識や情報を得るだけでなく、自分の現在地や課題を認識し、将来の目標をより具体的に考える機会となっていたことがうかがえた。

５．研修生としての自覚と今後への抱負

自由記述欄では、今回受けた支援や得られた経験を、自身の成長に生かすとともに、後輩や社会へ還元したいという思いが示された。第一期生として選ばれたことへの誇りや責任感に触れ、今後の研究や活動に真摯に取り組みたいとする回答もあった。

具体的には、次期研修生への体験談の共有、事前説明や相談への協力、現地研修に関する情報提供などに関わりたいとの意向が挙げられた。また、将来は自分も若い世代を支える側になりたいという抱負や、いただいた機会を次の世代へつなぐ「恩送り」の考え方も示されていた。

研修後の継続的な交流を望む声も複数寄せられた。今回の参加者同士の懇親会や近況共有に加え、歴代の修了生や次期研修生がつながる同窓会のような場を設け、分野や世代を越えて学び合い、将来の協働につなげたいという提案があった。

今後の研修に対しては、互いの専門分野や個人活動で得た学びを共有する時間を充実させたいという要望があった。一方で、限られた期間に共通プログラムと個人の専門活動が重なったため、活動の配分や研修期間を見直すことで、学びをさらに深められるのではないかという意見も寄せられていた。

このほか、現地の研究者や起業家等との交流をさらに広げる機会や、募集パンフレットのデザインを工夫し、事業の魅力をより多くの学生へ伝えることへの提案もあった。これらは、研修生が事業の継続や発展に関心を持ち、自身もその一端を担いたいと考えていることを示している。

６．総括

令和７（2025）年度の海外研修事業を通じて、当財団は、多様な専門分野で学ぶ研修生に対し、海外の企業や大学等を訪れ、現地の人々と対話し、自ら課題に取り組む機会を提供することができた。

終了報告書からは、研修生が、専門分野に関する知見を深めるとともに、自ら行動すること、他者の視点を受け入れること、問いや仮説を見直すことの重要性を学んだことが確認された。海外の環境を実際に体験したことは、自分の学修や研究、将来の進路を捉え直す契機となっていた。

本海外研修で得られた学びは、大学院進学、研究の継続、留学、就職、起業など、それぞれの目標へ結びつけて考えられていた。また、研修生同士や現地の研究者等との関係を継続し、学びや経験を次の世代へ還元したいという意志も示されていた。

一方で、専門分野や個人活動の成果を共有する時間、共通プログラムと個人活動の配分、修了後の交流の機会については、今後の事業を検討するうえで参考となる要望が寄せられた。研修後の学びの活用や交流の継続にも目を向けることが、今回得られた経験を長期的な成長につなげるうえで重要と考えられる。

当財団は、今回の研修で得られた成果と研修生の意見を事業運営に生かし、研修生が海外での学びを通じて専門性と広い視野を身につけ、社会に貢献する人材へと成長することを後押しすることを重視しつつ、研修を修了した者と次年度の研修生が互いに経験や知見を共有し、継続的に学び合うことができる機会の形成にも寄与していく考えである。

以上